

腎臓内科、血液浄化センターのこれまでの歩みと今後の展望について  
当院は、昭和58年5月1日に北海道で初めての徳洲会病院として開院しました。当時の徳洲会病院の中では、全国で10番目に出来た病院でした。  
創設者である徳田 虎雄先生の「生命（いのち）だけは平等だ」の理念が色濃く反映していた時代の徳洲会黎明期に出来た病院の一つでした。  
当院の「透析室」の開設は、開院後2年目の昭和60年4月でした。  
この原稿を作成している当科の責任者であります私 小野寺 康博が研修医として当院に入職したのが、昭和62年5月でしたので、当院の腎臓内科、血液浄化センターの歩みと私自身の履歴と重なる部分が大きいです。  
そのため、当科のご紹介としては異型ではありますが、敢えて経過と現状のご理解を得易くなることを期待して、当院の腎臓内科、血液浄化センターの語部的な存在として、当科の沿革を私の履歴と重ねながら解説をさせて頂くと致します。  
開設当初は数名の透析患者様達でしたが、徐々に患者様の数も増して来ました。開設当初の「透析室」の責任医師は当時副院長をされていた外科の河合 美智雄先生でしたが、研修の一環として「透析室」を1～2か月間の期間で研修医に rotation させていましたが、透析患者様達の中の独特のキャラクターをお持ちの方達が醸し出す雰囲気と慢性疾患の典型として「治ることの無い病態」であるという印象からか、研修医達からは正直に言って敬遠されがちな部署でした。  
私は、ICU 入室中の受け持ちの重症患者の治療を通じて、その研修の過程で循環管理と呼吸管理に関してある程度の outline を学んだ後で体液管理を中心とした代謝管理の奥の深さに魅了され、透析治療という人為性が強い治療内容に興味を惹かれました。  
当時、研修医達の中で「Generalist か Specialist か？」と言った議論が時折成されていた中で、私は少数派でしたが（私一人だったかも知れない）Generalist の方向を可及的に求める中で自分の専門性をコニーデ型の山のように形成して行きたいなどと大それたことを考えておりました。  
そのような中で、唯一院内で総合性を求めるのに好適な対象患者を透析患者様達の中に見出しました。当時は（今もそうかも知れませんが）「透析」を受けているという付帯状況が各病態で各科にコンサルトしても敬遠されがちな理由になっておりました。そのため、総合的な視点や管理の中でのより適切なコンサ

ルテーションの在り方が工夫されると思われた点多々あり、**Generalist**としての資質を試され且つ涵養する機会に満ちている場であると認識しました。

そのような私の診療態度が当時の院長の目には「透析患者を熱心に診ている研修医」と映った様子で、チーフレジデントを終了した後に「透析室長」の辞令を頂いて事実上の透析室の責任者の後継者になりました。

札幌市内や道内の透析を長年御担当されている重鎮的な先生方に当時の当院院長（故佐々木 英制先生）を通じてご紹介を頂きました。新札幌に新築移転して来た札幌社会保険総合病院（現 北辰病院）の透析部長であられた戸澤 修平先生や当時の岩見沢市立病院副院長であられた故大平 整爾先生に直接ご紹介して頂きました。戸澤先生には困難な症例を直接病院にお伺いして教えを乞わせて頂きました。また、大平先生にも学会や研究会等でお会いした際にもお気軽にお声を掛けて頂き、折に触れてご相談に応じて頂いておりました。

先輩や同期の研修医達が初期研修を終了した後に次々と後期研修（当時の呼称で、現在の専攻医研修に相当）に旅立って行くのを脇目で見ながら、「さて自分は何を **specialty** に選ぼうか？」と思案しつつも、漠然とではありますが一般方向としては代謝に関わる領域になるであろうとは考えておりました。

医学生の中から米国へ行ってみたいといった憧れに似た気持ちを抱いていて、英語の勉強も地道にはありましたが続けながら暗中模索しておりました。

当時（昭和63年～平成2年頃）総合診療研究会というのが日本プライマリケア学会とは別に立ち上がった頃で、総合診療的なアプローチが捨て切れないでいたところへ、当院二代目院長の江端 英隆先生から総合診療研究会を紹介して頂いて入会し、私の内科指導医でした矢崎 一雄先生（後述）と外科の熊谷明史先生（現 熊さんクリニック院長）から当時一度目の米国留学から帰国して間もなく東京国立第二病院の総合診療科にいらした福原 俊一先生（現 京都大学医療疫学教授）にご紹介を頂き、お会いして施設見学をさせて頂きました。その時に、米国留学の予定をご相談したところ、「日米医学医療交流財団」をご紹介頂き、こちらにも入会致しました。

平成元年には、3か月間だけですが、日高管内静内町の関連病院で地域医療研修を行わせて頂きました。その時の地域医療指導医であられた故山田 茂先生からは、禅問答的な深遠な内容の数々のご指導を頂き、多くの点で眼を見開かされた想いでした。

平成3年11月に江端院長から院長宛に招聘されていた米国シカゴで開催され

る国際肝臓学会及びピッツバーグ大学見学研修への参加を私の留学準備の足しにするように「代理参加」することを勧められ、事前にピッツバーグ大学やシカゴ市内の大学の腎臓関連の科の先生方に手紙を送ってアポイントを取りました。研修旅行中に一部別行動を取らせて頂き、予め面談の約束を取らせて頂いた各先生方に腎臓領域を中心とした留学のための御相談をさせて頂き、研修旅行から帰国しました。

茅ヶ崎徳洲会病院の米国留学経験をお持ちの外科の青木 重憲先生（日本への ACLS 導入、ニューオリンズのチューレン大学に留学）、腎臓内科の須藤 博先生（現 大船中央病院、アリゾナ州留学）にご相談して「組織のトップに頼むと良い」等との貴重なアドバイスを頂いて、助言通りにやり取りした結果、結局ピッツバーグ大学の腎臓移植内科の Jerry MacCauley 先生のもとに留学をさせて頂くことが出来ました。

日米医学医療交流財団からと徳洲会からと両方から奨学金を頂いて平成4年7月に米国に発ちました。

ピッツバーグ大学医学部図書館で最初に見つけた腎臓学の教科書の扉の裏に書かれていた序言に「A nephrologist is fortunate, because he can remain a generalist.」という一文を偶然発見した時は、何かの必然性すら感じました。

Lucky は「棚ぼた的な幸運」で、fortunate は努力して招き寄せる幸運であるとの違いを現地の人から教えられ、fortunate を実現して行く努力の必要を感じました。

その事を、他の日本から来られていた医師達にホームパーティに招かれた際に話したところ、「それは、Nephrologist だけじゃなくて Cardiologist だって Endocrinologist だって皆同じだよ。」と言われ、それもそうだなと思い、何故かほっとしたのを覚えています。

平成4年7月初めから平成6年6月末までの2年間の米国留学生活で貴重な経験を積みさせて頂いた上にいろいろな方達とお会いする機会に恵まれ、その折々に大変貴重な学びを頂いた後に帰国しました。帰国の2か月前に父を大腸癌（肝転移合併）で亡くしたため、一時帰国しましたが、初七日が終わってまた米国に戻った後に最終的な帰国前の慌ただしい中で2回目の米国内での学会発表（ポスター）を済ませることが出来ました。

私の留学中は、私の内科の指導医でもあり、恩師であります矢崎 一雄先生（現清明館診療所院長）と当時の北大第2内科の腎臓内科チーム長の河田 哲也先

生にご援助を頂き、透析室の診療を継続して頂いておりました。

矢崎先生は、沖縄県立中部病院研修医時代に大学の後輩でありました前述の福原先生が医学生として同上病院を見学実習に行った折りに知り合った仲でもあり、福原先生にご紹介を頂く際にも労をお取り下さいました。常に「**standard**で**orthodox**な治療を行うように。そのためには、やはり時間的な経過の中で淘汰を受けたエッセンスが残っている教科書に立ち返るべきだ。」との教えは今も私の心の中に大きな比重を占めております。

河田先生には、私の帰国後も2年間に亘り定期的に2週間に1回の割合で腎臓内科的なコンサルテーションを受けて頂き、御指導を頂きました。

帰国後は、私は腎臓内科医長と透析室室長及び研修委員会委員長を兼務する中で月に数回の当直業務もこなし、時間外診療や救急対応も輪番で行ない、研修医の地域医療研修視察の為の離島への出張等も行うなど多忙を極めました。

国内及び国外を問わず、留学中に徳洲会病院（当院）から奨学金を受給されていた場合は、留学期間の倍の期間を徳洲会病院で勤務して還元する約束があり、そのうち半分は僻地離島で還元することになっておりました。これは、当院の研修医達の自主的な集まりと病院幹部との間で取り決めた内容でもあり、その後の後期研修の在り方に大きな影響を与える内容でもありました。

平成6年6月から平成8年4月までは当院で、平成8年4月から平成10年4月までは日高管内静内町の静仁会静内病院（徳洲会グループ病院）で地方勤務致しました。静内病院では、透析センターでの勤務は勿論のこと、腎臓内科的診療のみならず内科全般に亘って診療をさせて頂きました。訪問診療も行い、地方の家家のそれぞれの様々な事情の違いも垣間見る事が出来ました。

また、ANCA 関連腎炎で慢性腎不全となって維持透析を行っていた女性患者に当時千葉西総合病院（徳洲会グループ病院）で腎移植を積極的に行い始めた時期でもあったため、その女性の母親が **Donor** となって生体腎移植が成され、現在も当院の私の外来でその患者様を **follow** しております。

私が、静内に赴任するのとは行き違いに夕張市立病院から当院に転勤して来られた横山 隆先生（札幌医科大学小児科医局を経て東京女子医科大学腎臓センター勤務後に帰道）が透析室の診療を担当して下さいました。

平成10年4月以降は増改築後の新しい「透析センター」で横山先生とご一緒に透析診療も含めた腎臓関連の診療を腎臓内科として行っておりました。

横山先生は、積極的に学会活動を行っておられ、国内は勿論、米国やヨーロッ

パにおける国際学会でも果敢にご発表をされておりました。

平成22年に横山先生は札幌東徳洲会病院の腎臓部門の支援を請われて転勤となりました。

平成24年4月に大江 公則先生（北大第2外科所属 血管外科専門）が着任されて一緒に診療を致しました。同年6月に南郷18丁目から現在の大谷地に新築移転し、「透析センター」から「血液浄化センター」に名称も変更となりました。大江先生には血液浄化センター長を担当して頂きました。

平成28年8月に大江先生は当院を退職されたため、現在に至るまで再び私一人で腎臓内科、血液浄化センターで診療を継続しておりましたが、以前に当院内科外来をご担当、ご援助を頂いたことがあります須藤 純一先生に平成29年春から透析回診業務のご助力を定期的に頂いており、恩恵を賜っております。この間、外来及び入院出の患者診療を継続する中で、CKDを中心とした腎臓関連疾患の治療管理を行って参りました。

腎生検は、少ない年で10件、多い年には20件を越える時もありましたが、適応のある患者様には極力積極的に行なうように心がけ、生検数はコンスタントに二桁以上を維持して参りました。

今後の展望としては、CKDを中心に内科の中での腎臓内科の位置付けが「臨床の必須の item」となり得るように、内科臨床診療の中で他領域と密接な連関を保ちながら応用が効く診療能力を涵養する場となり得て多くの良い人材が活用出来るように、これまでに蓄積されて来たエッセンスを引き継いで行ける場創りを継続して行くべく更に努力を積み上げて行きたいと考えております。